※ かみなりさん

昔、茶屋で人々が酒を飲んでいると雷が鳴りだした。人々はあわてて帰った。主人は雷はやらしくないものだ、落ちて来たらいじめてやろうとしていたところに雷が落ちてきた。

雷は許してくれとあやまりにあやまるので放してやったら空へあがっていったが、風呂敷包みをおとしていった。あけてみると重箱が三つ入っていた。上のものにはあかい布が入っていた。これは稲妻のタネだった。その下をあけたらタニシの干したものが入っていた。これは嘘をつく人のヘソだった。その下をあけてみれといったら、女中は、「なんぼ主人のいうことでも、ヘソの下はみせられない」と、いった。